

■ 概況

7/8～7/14のNYMEX・WTI先物市場は、72.94～75.25ドルの範囲で推移した。

7月15日は、対立していたサウジとUAEの合意が成立し、近日中にOPECプラスの協議が再開、減産緩和が実施されるとの報道があり、需給緩和の見通しから、続落した。また、前日発表の米国エネルギー情報局(EIA)の前週末石油在庫報告でガソリンが市場予想に反し積み増しだったこと、さらに、コロナ変異種の感染再拡大の懸念も、値下がり要因となった。8月限の終値は前日比1.48ドル安の71.65ドル。

週末16日は、朝方、前日の流れを受けて売られたが、売り一巡後は、米国小売売上高の堅調さ、週末のポジション調整などを受けて買われ、3日ぶりに反発した。ただ、OPECプラスや新型コロナの先行きの不透明さから上値は重かった。なお、米国内の稼働中の石油掘削装置は前週末比2基増の380基。8月限の終値は前日比0.16ドル高の71.81ドル。

週明け19日は、18日の閣僚協議で、OPECプラスが8月から年末までの各月40万b/dごとの減産緩和、現行減産枠組みの2022年末までの維持、減産の基準となるUAE・サウジを含む5か国の基準生産量の2022年5月以降の拡大等の決定を受けて、感染再拡大の中、需給緩和への懸念から、大幅に反落した。米国をはじめとする世界的な株安やドル高の進行も、値下がり要因となった。8月限の終値は前日比5.39ドル安の66.42ドル。

20日は、前日急落の反動で買戻しが入り、また、翌日発表予定のEIA米国在庫報告で、原油・ガソリンともに、取り崩し予想も値上がり要因となった。さらに、米国株価の回復、米国長期金利の持ち直しも、支援材料となった。納会日を迎えた8月限の終値は前日比1.00ドル高の67.42ドル。

21日は、前日に続き週初めの下落の反動と米国株式の回

復に伴うリスク回避姿勢の後退で、買いが膨らみ大きく上伸した。同日発表の米国エネルギー情報局(EIA)の米国石油在庫統計で、原油在庫は増加したものの、ガソリン・中間留分等の在庫は減少、加えて、オクラホマ州クッシングの原油在庫も、昨年1月以来の水準に低下、先行き需要の堅調さを示した。この日から取引の中心限月となった9月限の終値は前日比3.10ドル高の70.30ドル

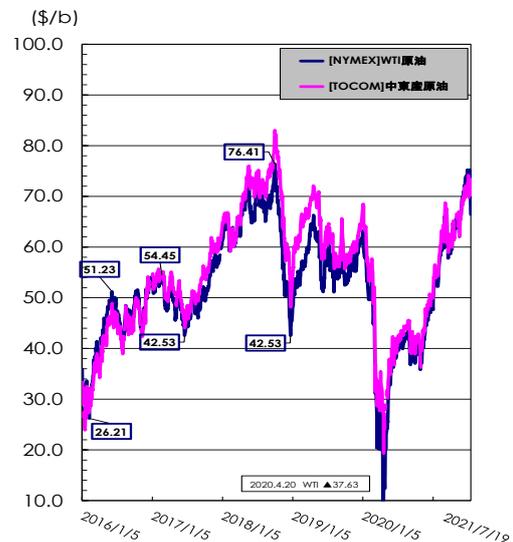
アジアの指標原油である中東産ドバイ原油/東京市場(9月渡し)は、7月8日～14日の間71.20～74.80ドルの範囲で推移した。7月15日72.40ドル、16日71.60ドル、19日71.50ドル、20日67.60ドル、21日67.60ドルと推移した。

為替は7月8日～14日の間109.92～110.67円の範囲で推移した。7月15日109.93円、16日109.91円、19日109.88円、20日109.57円、21日109.98円で推移した。

財務省が7月21日に発表した貿易統計(速報・旬間)によると、6月下旬の原油輸入平均CIF価格は、48,306円/klで、前旬比351円高、ドル建て69.97ドルで前旬比0.41ドル高、為替レートは1ドル/109.76円。また、同日発表の貿易統計(速報・旬間)によると、6月の原油輸入平均CIF価格は、47,596円/klで、前月比2,789円高、ドル建て69.11ドルで前月比3.66ドル高、為替レートは1ドル/109.49円。

そのような中で、7月19日時点の小売価格は、ガソリンが前週(7月12日)比0.3円の値上がり、軽油も同0.3円の値上がり、灯油は同5円の値上がり(18%ベース)だった。ガソリンは7週連続の値上がり、軽油も7週連続の値上がり、灯油は33週連続の値上がりだった。この週(7月第3週)の原油コストは値下がり、次週の元売の卸価格はガソリン・軽油・灯油ともに、全社前週比0.5円の引き下げとなった模様。

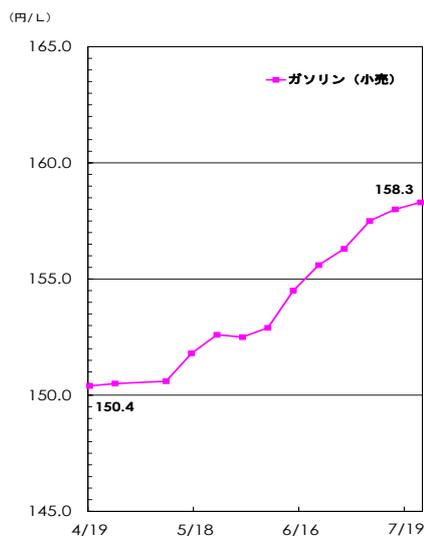
原油		今週	前週比	前年比
需給	原油処理量 (千kl)	7/11～7/17	2,485 ▲163	▲
	トッパー稼働率 (%)	"	64.6 ▲4.3	▲
	原油在庫量 (千kl)	7/17	11,740 ▼34	▼
価格	中東産原油(TOCOM) (\$/bbl)	7/19	70.26 ▼2.25	▲28.6
	WTI原油(NYMEX) (\$/bbl)	7/19	66.42 ▼7.68	▲25.6
	原油CIF単価 (\$/bbl)	6月下旬	69.97 ▲0.41	▲45.42
	①原油CIF単価 (¥/kl)	"	48,306 ▲351	▲31,662
	②ドル換算レート (¥/\$)	"	109.76 ▼0.17	▼2.00
	外国為替TTSレート (¥/\$)	7/19	110.88 ▲0.29	▼2.36



(単位: 千kl、円/%)

ガソリン		今週	前週比	前年比	
需給	生産	7/11 ~ 7/17	750 ▲ 29	▼ -	
	輸入	"	n.a.	n.a.	
	出荷	"	572 ▼ -256	▼ -	
	輸出	"	0 ▼ -30	➡ -	
	在庫	7/17	2,208 ▲ 179	▲ -	
価格	業転 [陸上ローリー 4地区平均] (RIM)	7/13 ~ 7/19	68.2 ▼ -0.4	▲ 26.5	
	先物 [期近物/終値]	(TOCOM/東京湾)	7/13 ~ 7/19	65.8 ▼ -1.8	▲ 25.8
		(TOCOM/中部)	7/19	67.0 ▼ -0.2	▲ 25.8
	小売 [週動向] (資工庁公表)	7/19	158.3 ▲ 0.3	▲ 26.1	

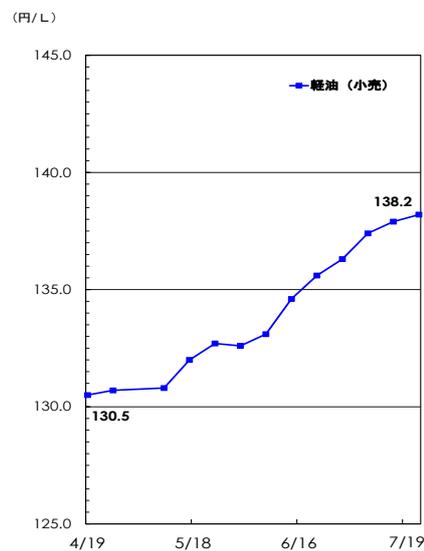
※業転、先物価格は税抜き価格



(単位: 千kl、円/%)

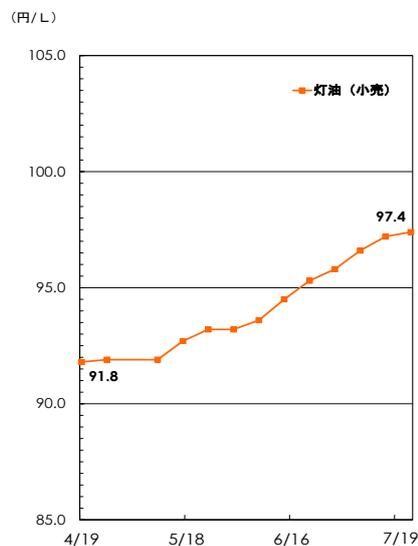
軽油		今週	前週比	前年比	
需給	生産	7/11 ~ 7/17	664 ▲ 32	▲ -	
	輸入	"	n.a.	n.a.	
	出荷	"	513 ▼ -41	▼ -	
	輸出	"	154 ▲ 154	▲ -	
	在庫	7/17	1,787 ▼ -2	▲ -	
価格	業転 [陸上ローリー 4地区平均] (RIM)	7/13 ~ 7/19	69.5 ▼ -0.4	▲ 26.0	
	先物 [期近物/終値]	(TOCOM/東京湾)	7/13 ~ 7/19	69.0 ▼ -0.2	▲ 22.1
		(TOCOM/中部)	7/19	-	-
	小売 [週動向] (資工庁公表)	7/19	138.2 ▲ 0.3	▲ 25.3	

※業転、先物価格は税抜き価格



(単位: 千kl、円/%)

灯油		今週	前週比	前年比	
需給	生産	7/11 ~ 7/17	82 ▼ -4	▼ -	
	輸入	"	n.a.	n.a.	
	出荷	"	14 ▼ -79	▼ -	
	輸出	"	53 ▲ 53	▲ -	
	在庫	7/17	1,763 ▲ 15	▼ -	
価格	業転 [陸上ローリー 4地区平均] (RIM)	7/13 ~ 7/19	69.0 ▼ -0.6	▲ 25.7	
	先物 [期近物/終値]	(TOCOM/東京湾)	7/13 ~ 7/19	62.7 ▼ -2.0	▲ 21.3
		(TOCOM/中部)	7/19	65.5 ▼ -1.6	▲ 22.5
	小売 [週動向] (資工庁公表)	7/19	97.4 ▲ 0.2	▲ 18.6	



■ 関連情報

1 海外/原油

7月21日のNYMEXのWTI先物原油は大幅続伸、70ドル台の水準を回復した。週初めの下落の反動と米国株式の回復に伴うリスク回避姿勢の後退で、買いが膨らみ大きく上伸した。OPECプラスの合意(結束)については、18日の合意直後との間で市場の評価に相違が見られる模様。なお、同日発表の米国エネルギー情報局(EIA)の米国石油在庫統計で、原油在庫は210万バレル増と市場予想(450万バレル減)に反し9週ぶりに積み増しとなったものの、ガソリン・中間留分等の石油製品在庫は市場予想に反し減少、加えて、先物原油の受け渡し点であるクッシングの原油在庫も昨年1月以来の低水準で、先行き需要の堅調さを示した。この日から取引の中

心限月となった9月限の終値は前日比3.10ドル高の70.30ドル、10月限の終値は2.95ドル高の69.57ドル。

EIAによると、7月19日時点のガソリンの小売価格は、前週比2.0セント値上がりの1ガロン3.153ドル(92.2円/ℓ)、ディーゼルは同0.6セント値上がりの3.344ドル(97.8円/ℓ)となった。ガソリンは4週連続の値上がり、ディーゼルは12週連続の値上がりとなった。

2 国内/製品需給 (1) 出荷

石連週報によれば、2021年7月11日～7月17日に休止したトッパー能力は65.8万バレル/日で、前週に対して24.2万バレル/日減少した(全処理能力は345.8万バレル/日)。

原油処理量は248.5万klと、前週に比べ16.3万kl増加。前年に対しては14.0万klの増加。トッパー稼働率は64.6%と前週に対して4.3ポイントの増加、前年に対しては4.7ポイントの増加となった。

生産は前週に比べて灯油が減産、その他の油種で増産となった。ガソリン/4.1%増、ジェット/10.3%増、灯油/4.3%減、軽油/5.0%増、A重油/1.4%増、C重油/51.9%増。今週のC重油の輸入は0.0万kl(前週比0.3万kl減)。軽油の輸出は15.4万kl(前週比15.4万kl増)。

出荷(輸入分を除く)は前週比でジェット、C重油が増加し、その他の油種で減少した。前年比ではC重油が増加し、その他の油種で減少となった。ガソリンの出荷は57.2万kl(対前週30.9%減)と2週連続で減少した。ジェット5.5万kl(対前週18.8%増)、灯油1.4万kl(対前週84.6%減)、軽油51.3万kl(対前週7.5%減)、A重油10.2万kl(対前週36.0%減)、C重油27.4万kl(対前週69.0%増)。

(単位:千kl)

	今週 (7/11 ~ 7/17)	前週 (7/4 ~ 7/10)	前週比
ガソリン	572	828	▼ -256 (-31%)
ジェット燃料	55	47	▲ 8 (17%)
灯油	14	93	▼ -79 (-85%)
軽油	513	554	▼ -41 (-7%)
A重油	102	159	▼ -57 (-36%)
C重油	274	162	▲ 112 (69%)
合計	1,530	1,843	▼ -313 (-17%)

※今週出荷量 = (前週末在庫 + 今週生産 + 今週輸入) - (今週輸出 + 今週末在庫)

2 国内/製品需給 (2) 在庫

7月17日時点の在庫は、軽油、C重油で取り崩しとなり、その他の油種で積み増しとなった。前年に対してはガソリン、ジェット、軽油が増加し、その他の油種で減少となった。

ガソリンは220.8万kl、前週差17.9万kl増。前年に対しては43.0万kl多い。

灯油は176.3万kl、前週差1.5万kl増。前年に対しては7.1万kl少ない。

軽油は178.7万kl、前週差0.2万kl減。前年に対しては15.4万kl多い。

A重油は73.7万kl、前週差0.4万kl増。前年に対しては0.9万kl少ない。

C重油は183.6万kl、前週差3.2万kl減。前年に対しては12.5万kl少ない。

(単位:千kl)

	今週 (7/17)	前週 (7/10)	前週比
ガソリン	2,208	2,029	▲ 179 (9%)
ジェット燃料	828	769	▲ 59 (8%)
灯油	1,763	1,748	▲ 15 (1%)
軽油	1,787	1,789	▼ -2 (-0%)
A重油	737	733	▲ 4 (1%)
C重油	1,836	1,868	▼ -32 (-2%)
合計	9,159	8,936	▲ 223 (2.5%)

3 国内/製品卸売価格 (1) 元売会社 仕切価格改定動向

7月13日～19日の指標原油価格は前週(7月6日～12日)比で値下がりし、為替レートも円高で、円建ての原油コストは値下がりしたと見られる。

これを受けて、次週(7/22～7/28)の大手元売卸価格は、ガソリン・灯油・軽油ともに、全社前週比0.5円の値下げとなった模様。

3 国内/製品卸売価格 (2) 業転価格・先物価格動向

7月13日～19日の製品スポット市況は、7月6日～12日平均と比べ、全ての油種・取引で値下がりした。

直近(7/13～7/19)の陸上スポット価格平均値(千葉・川崎・中京・阪神の4地区の陸上ラック価格)は、前週比で、ガソリンは0.4円の値下がり、灯油は0.6円の値下がり、軽油は0.4円の値下がりだった。直近週(7/13～7/19)において、ガソリンは121～122円台で値下がり、灯油は68～69円台で値下がり、軽油は69～70円台で値下がりして推移した。

東京湾渡しの海上スポット平均価格は、直近週(7/13～7/19)に、前週比で、ガソリンは0.2円の値下がり、灯油は1.9円の値下がり、軽油は0.2円の値下がりだった。海上スポット価格は、同期間(7/13～7/19)に、ガソリンは123円台で値下がり、灯油は64～67円台で大きく値上がり後値下がり、軽油は71円台で値下がりして推移した。

先物価格の平均は、前週比で、ガソリンは1.8円の値下がり、灯油は2.0円の値下がり、軽油は0.2円の値下がりだった。先物価格は、同期間(7/13～7/19)に、ガソリン117～122円台で大きく値下がり、灯油61～64円台でわずかに値上がり後大きく値下がり、軽油68～70円台でわずかに値上がり後大きく値下がりして推移した。

(RIM) (単位: 円/%)

陸上ローリー 4地区平均]	今週 (7/13～7/19)	前週 (7/6～7/12)	前週比
	レギュラー	68.2	68.6
灯油	69.0	69.6	▼ -0.6
軽油	69.5	69.9	▼ -0.4

(TOCOM) (単位: 円/%)

[期近物/終値] [平均]	今週 (7/13～7/19)	前週 (7/6～7/12)	前週比
	レギュラー	65.8	67.6
灯油	62.7	64.7	▼ -2.0
軽油	69.0	69.2	▼ -0.2

※上記価格は税抜き価格

参考値 (7/13～7/19実績値) (単位: 円/%)

油種	現物	先物	平均
ガソリン	▼ -0.4	▼ -1.8	▼ -1.1
灯油	▼ -0.6	▼ -2.0	▼ -1.3
軽油	▼ -0.4	▼ -0.2	▼ -0.3
A重油	▼ -0.4		

(出所) 現物: RIM社陸上ローリー4地区平均価格

(千葉・川崎・中京・阪神)

先物: TOCOM京浜地区海上バージ渡し平均価格

4 国内/製品小売価格

7月19日時点のSS店頭価格は、ガソリンが前週(7月12日)比0.3円高の158.3円、軽油も同0.3円高の138.2円、灯油は18%ベースで同5円高の1,754円(1%ベースでは同0.2円高の97.4円)。ガソリンは7週連続の値上がり、軽油も7週連続の値上がり、灯油は33週連続の値上がりだった。

ガソリンについて、都道府県別には、値上がりは32道府県、横ばいは4県、値下がり11都県だった。全国最安値は151.7円の岡山県(同1.1円高)、その次に安かったのは152.5円の徳島県(同0.2円高)、他方、最高値は167.8円の長崎県(同0.3円高)だった。最も値上がりしたのは同1.5円高

の佐賀県(159.3円)で、横ばいは滋賀県・島根県・神奈川県・青森県の4県、最も値下がりしたのは同0.5円安の愛知県(155.7円)だった。

今週(7月13日～19日)は、指標原油価格は値下がりし、為替レートもわずかに円高で、円建ての原油コストは値下がりしたと見られる。次週(7月22日～28日)適用の元売の卸価格は、ガソリン・軽油・灯油ともに、全社前週比0.5円の値下げとなった模様。次回調査時(7月26日)のガソリンの小売価格は小幅な値下がりが見込まれる。

(単位: 円/%)

(資工庁公表) [週動向]	今週 (7/19)	前週 (7/12)	前週比	直近高値
レギュラー	158.3	158.0	▲ 0.3	08/8/4 185.1
灯油	97.4	97.2	▲ 0.2	08/8/11 132.1
軽油	138.2	137.9	▲ 0.3	08/8/4 167.4

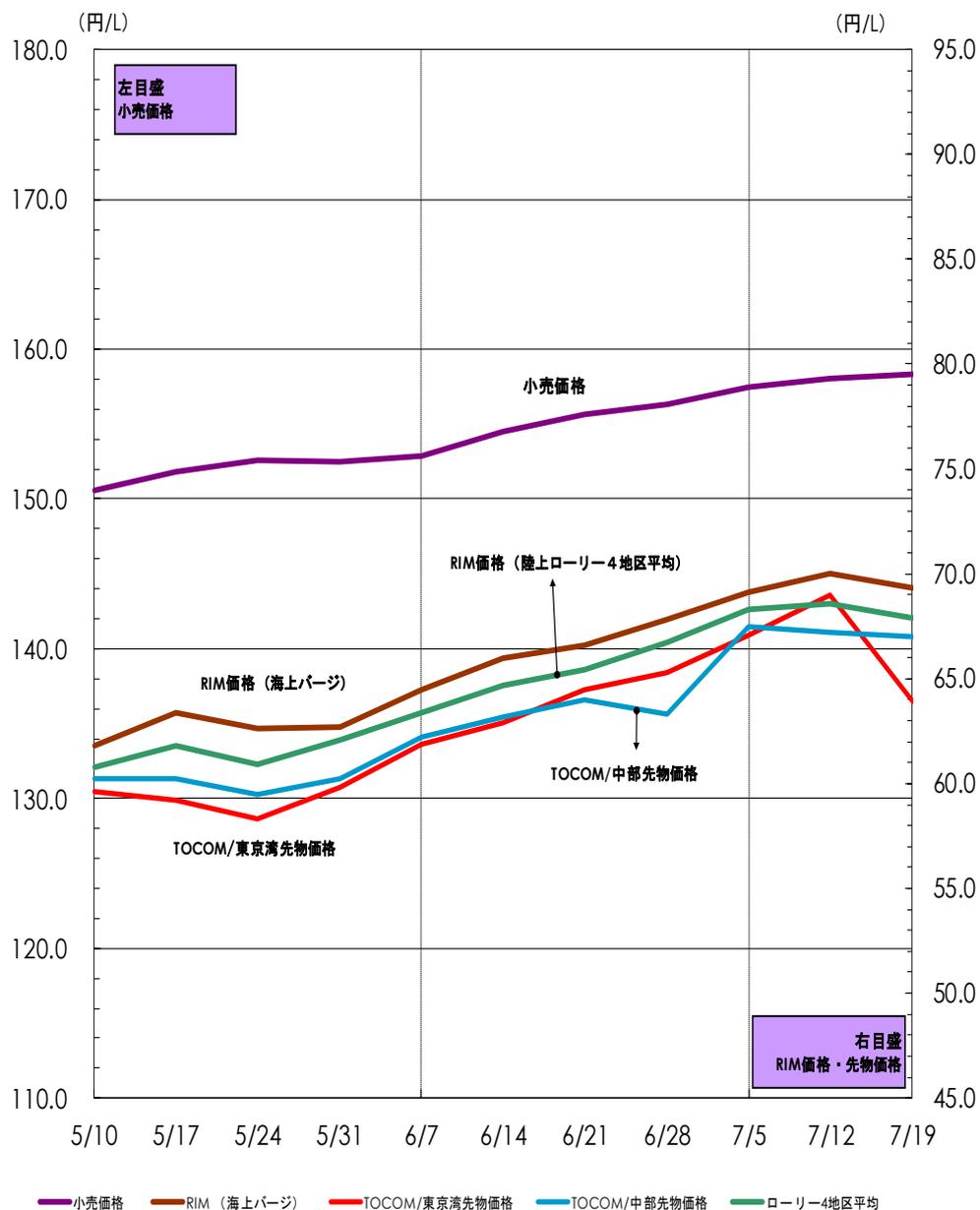
※ 現金一般価格の全国平均値 (消費税込み)

07年4月以降 2,000店舗を対象。

直近高値とは2003年10月以降の最高値。

ガソリン価格推移

(2021/5/10 ~ 2021/7/19)



(注)①「小売価格」は消費税込みの価格 RIM価格・TOCOM先物価格は税抜き価格
 ②RIM価格(陸上ローリー)は4地区平均価格

■ お知らせ

本レポートは当センターのホームページ (<https://oil-info.ieej.or.jp>) にも掲載しています。
次回 (2021第17号) の公表は、7/30 (金) 14:00 です。

「セルフSS出店状況」(令和2年3月末現在) は、8月26日 (水) 14:00に公表しました。当センターのホームページをご覧ください。

本レポートのご利用について

本レポートについて、テキスト、グラフィックス及びその他の情報(以下、併せて「ドキュメント」)に関わるすべての知的所有権は、一般財団法人日本エネルギー経済研究所石油情報センター(以下、当センター)又は当センターヘドキュメントを提供している第三者へ独占的に帰属します。
当センターの事前の書面による承諾を得ることなく、ドキュメントを転用、複製、改変等の一切を固く禁じています。
また、ドキュメント内容に関しては万全を期していますが、その内容の正確性および安全性を保証するものではありません。

「ウィークリー オイル マーケット レビュー」とは

平成16年5月に経済産業省資源エネルギー庁資源・燃料部石油流通課 主催の「石油製品市場動向研究会」が取りまとめた中間報告で、「わが国石油産業における市場機能、価格発見機能が更に強固なものとなることが望まれるとともに、中期的な課題として、石油産業において確立していく市場機能、価格発見機能に基づく合理的な価格認識及びそれを踏まえた自己責任の下での経営判断の必要性について、石油産業関係者の認識が更に深まることにより、わが国の基幹産業である石油産業全体としての合理性、活力が一層高まることを期待したい。」と提案されています。
当センターでは、これを受けて石油連盟、全国石油商業組合連合会をはじめ関係機関等の協力を得て、石油関係者、企業の経営者層(特に給油所経営に携わる方々)から一般消費者の方々に対し、原油・石油製品需給や価格動向を的確に理解するツールの一つとして、「ウィークリーオイルマーケットレビュー」を平成17年5月より定期的に発信しています。

本レポート掲載データの出所について

①【原油・石油製品需給】〈石連週報〉

石油連盟(石連)「原油・石油製品供給統計」週報データを千KL単位に換算して採用。
「出荷」は当センターの推計。

②【原油・先物価格】〈WTI原油、中東産原油〉

WTI原油は、ニューヨーク商業取引所(New York Mercantile Exchange : NYMEX) WTI原油先物の期近物・終値を採用。

中東産原油は、東京商品取引所(The Tokyo Commodity Exchange : TOCOM) 中東産原油の期近物・終値を採用。 ※「二番限(翌月限)」

中東産原油は、ドバイ原油及びオマーン原油の平均価格を指標としている。為替換算レートとして、三菱東京UFJ銀行発表TTM (Telegraphic Transfer Middle rate : 中値) を採用。

原油CIF単価は、財務省貿易統計「原油・粗油平均CIF単価」(旬間値) を基に、石油連盟が試算したドル表示の参考値を採用。

③【国内製品・元売仕切価格】

元売仕切価格は、元売会社(一次卸)と系列特約店など(二次卸)との間で売買される卸価格。

元売会社は、平成22年4月以降、現行の新価格体系を見直し、原油や製品相場、他社仕切りなどの動向を総合的に判断し、具体的方針を決める方式に変更。さらに平成26年6月以降、原油コストをより重視する方式に変更している。

④【国内製品・業転価格】〈RIM業転〉

国内陸上ローリー価格は、リム情報開発株式会社(RIM)「LORRY RACK・レポート」の千葉、川崎、中京、阪神の4地区の平均値を採用(いわゆる4RIM価格とは異なる)。

⑤【国内製品・先物価格】〈TOCOM〉

TOCOM 東京湾及び中部石油製品期近物・終値を採用。

TOCOM東京湾は京浜地区海上バージ渡し価格(平均値)、TOCOM中部は中部地区陸上ローリー渡し価格(平均値)。

⑥【国内製品・小売価格】〈週動向調査〉

約2,000 SSを対象に週次ベースのSS店頭における店頭現金価格の全国平均値を採用(資工庁公表)。原則として、毎週(月)時点の価格を調査し(水)14:00に公表(資源エネルギー庁HPに掲載)。